

イ スリランカの教育の現状について

スリランカにおいては、医療と教育は基本的に無料である。したがって、日本よりも社会保障制度が進んでいるように思えるが、実際にはそうではない。医療費、教育費が無料ということは、これらの費用を国の予算でまかなわなければならない、財政難のスリランカでは、最小限のサービスにとどまっている。現実的に、公立学校では十分な教育環境を整えることができず、公務員である教員の待遇も低い水準であるとのことだ。

スリランカの教育制度は、一般教育13年間と大学教育及び職業教育からなっている。一般教育は5歳から始まり、初等課程5年間、中等課程6年間、高等課程2年間と進む。小学校5年生段階で国家試験「5学年スカラシップ試験」が、中等課程（11年生）終了時点で「G, C, E-O. L.試験」（Oレベル試験）が、さらに13学年終了時点で「G, C, E-A. L.試験」（Aレベル試験）が実施され、貧しい家庭の子どもでも進路が確保できることを目指している。

しかし、これらの試験合格のために、小学校入学段階から学校を選び、私立学校に通わせたり、塾通いをさせたりする傾向が都市部を中心に広まっている。

高等課程の修了時にも卒業試験がある。制度的に教育が奨励されているのは、中等課程（11年生）卒業までで、それ以降は、学校も遠くなり、バスで通わなければならないケースも少なくない。通学費を払えない貧しい家庭の子どもが通学するのは難しい。

高等課程修了後、大学へ進むことも可能だ。大学も学費は無料であるが、非常に難関で、全体の約2%の優秀な生徒だけが進学できる。しかし、いくら大学を出たとしても、就職がなかなか難しく、国外へ優秀な人材が流出するという事態も起きているとのことだ。これらの実態から、日本と制度が違っても、経済力と学力との相関関係、塾通いの実態などは共通する部分があると感じた。

4 教育指導への活用について

(1) スリランカと日本の子どもたちへの意識調査から

ア アンケート内容

スリランカのある公立小中学校において、スリランカの子どもたちの意識を調査し、それを日本の同年齢の子どもたちの意識と比較し、考察した。

イ 調査対象

- (ア) スリランカの子どもたちへの調査・・・A公立小中学校在籍児童生徒（計42名）
（内訳：11歳8名、12歳7名、13歳10名、14歳13名、15歳4名）
- (イ) 日本の子どもたちへの調査・・・県内公立B小学校及びC中学校（計180名）
（内訳：11歳53名、12歳43名、13歳39名、14歳24名、15歳21名）

ウ 質問事項と主な回答結果 質問項目の（ ）内は、日本の子どもに対する質問

質問項目	スリランカの子ども	日本の子ども
①自分の国が好きですか	はい 100% いいえ 0%	はい 93% いいえ 7%

② 一番好きな遊びは何ですか	1位：野球 25% 2位：クリケット 21% 3位：ソフトボール 15%	1位：サッカー 15% 2位：ゲーム 13% 3位：野球 11%
③ 将来の夢、職業は何ですか	1位：教師 45% 2位：医者 32% 3位：兵士、踊りの先生、エンジニア 各5%	1位：ない、決まっていない 39% 2位：サッカー選手 13% 2位：野球選手 13% 3位：医者 9%
④ コンピュータを使ったことはありますか	ある 43% ない 57%	ある 100% ない 0%
⑤ (使ったことがない人に) コンピュータを使ってみたいですか	はい 58% いいえ 42%	はい：－ いいえ：－
⑥ 一番ほしいものは何ですか	1位：車 27% 2位：本を読む、勉強 23% 3位：遊ぶこと 13%	1位：ない 17% 2位：ゲーム 17% 3位：お金 13%
⑦ 日本(スリランカ)を知っていますか	はい 79% いいえ 21%	はい 50% いいえ 50%
⑧ はいと答えた人だけ：日本(スリランカ)のことで知っていることは何ですか	1位：首都が東京 33% 2位：通貨の単位が円 10% 3位：きれいな国 6%	1位：聞いたことがあるだけ 60% 2位：津波、地震 10% 3位：貧しい国 8%
⑨ 得意な科目は何ですか	1位：英語 43% 2位：数学 19% 3位：理科(科学) 14% 4位：国語 12%	1位：数学 15% 2位：体育 14% 3位：英語、社会、家庭科 各13% 6位：国語 10%
⑩ 苦手な科目は何ですか	1位：タミル語 64% 2位：ない 24% 3位：図画工作 5%	1位：英語 22% 2位：数学 17% 3位：社会 15%

エ アンケートの考察

① 「自分の国が好きですか」

国内の政情が不安定なスリランカの子どもたちが全員「好き」と答えているのに対し、日本の子どもたちの7%が「きれい」と答えているという結果となっている。

② 「一番好きな遊びは何ですか」

両国とも野球に人気があるが、日本の子どもたちは、2位「ゲーム」(13%)、4位「おしゃべり(9%)」など、個人的な遊びが目立つ。

③ 「将来の夢、職業は何ですか」

スリランカの子どもたちは、「教師」(45%)、「医者」(32%)が最も高い。日本の子どもたちは、「決まっていない」(39%)がトップで、以下「サッカー選手」、「野球選手」、(各13%)で、違いが歴然としている。

④ 「コンピュータを使ったことはありますか」

スリランカでは43%、日本では100%であり、差がはっきりしている。

⑥ 「一番ほしいものは何ですか」

スリランカの子どもたちがほしいものは「車、勉強、遊ぶ（計63%）」で、生活に必要なものやお金で買えないものを求めている。日本の子どもたちは、ほしいものが「ない、ゲーム、お金（計47%）」となっており、このうち「ほしいものがない」は、すでに持っていて必要がないということではないかと推察される。また、新作のゲームソフト等をほしがる傾向や、買いたいものを手に入れるためのお金を求めるという傾向から、両国の子どもたちの生活実態や意識の差がうかがえる。

⑦ 「日本（スリランカ）のことを知っていますか」

スリランカの子どもたちの「日本の認知度（79%）」のほうが日本の子どもたちの「スリランカの認知度（約50%）」より高い。また、「スリランカという国を知っている」と答えた日本の子どもの60%は、「聞いたことがあるだけ」という回答で、実際の認知度は低い。

⑨ 「得意な科目は何ですか」、⑩ 苦手な科目は何ですか」

スリランカの子どもたちの得意科目は「英語（43%）」が断然多く、日本の子どもたちについては、きれいな科目のトップが「英語（22%）」で、対象的な結果である。

5 研修に関する全般的な所感・意見について

(1) 研修から学んだこと

日本のスリランカに対する国際協力的一端を見学できたことは大きな意義があった。とりわけ、「人間の安全保障」を目指して行っているさまざまなボランティア活動、現地のNGO/NPO等関係機関・団体等の取組を見学できたことは大きな収穫で、何より日本人ボランティアの方々の熱意や情熱を強く感じた。また、ホームステイや2つの学校訪問等を通して、多くのスリランカ人や現地の教師、子どもたちとの交流が図れたことも訪問した教師にとって得がたい貴重な体験であった。

その他にも、この国の政治制度や教育制度、経済状況、交通機関、宗教、身分制、自然環境、都会と農村の人々の暮らしぶり、食事、服装、習慣などについて、短期間であったが、体験を通じて学ぶことができた。このことは大変意義深く、今後、訪問団員が所属する教育現場において、子ども多文化共生教育、国際理解教育、開発教育の一貫として十分活かすことができると考える。団員が撮影した写真や購入した地図、絵葉書、図書、工芸品なども、訪問団員相互に連携して、必要に応じて提供しあうなど、現場で活用していきたい。

習慣の違いで言えば、この期間中のある日、レストランで料理を注文したときに、店員が首を横に振ったので、私は店員が「その料理はない」と言っているのだと思って別のものを注文しようとした。しかし、それは誤りだということに気づいた。スリランカ人は「イエス」のときに大きく首を横に振るので、店員は「はい、ありがとうございます」と言っているということだった。この違いには戸惑ってしまった。また、箸を使わず右手でカレーを食べる習慣や、トイレの使い方なども違っていた。

この経験などから、たとえば、日本とスリランカの文化や習慣の違いについて子どもたちにロールプレイを通して実際にさせて感想を言い合うなかで、「違い」を体感したり、世界中のあいさつを調べたりと発展させることも可能ではないだろうか。

さまざまな場所に訪問して、現地の人々から学ぶべきものが数多くあった。それは、

人と人との思いやりの心や相手への敬意、感謝や奉仕の精神、お互いの人権を尊重する心である。異国人である初対面の私たちに対して、非常に暖かく迎え入れてくれた経験から、やはりこれらの感情は、人間として誰もが持たねばならない大切なものだということを実感した。これらのことから、これまで狭い世界にいた自分に気づくとともに、国際社会においては、違った国や地域の人々が、違いを超えてお互いにその多様性を認め合い、協力することが大切であると実感できた。



(ジャンティー夫妻、サラさん、アジャントさん一家と訪問団員)



(校舎に世界地図が描かれたプアクワティヤ小中学校にて)

(2) 今後の課題

私たちの今後のテーマであるが、それは、国際化がますます進む中、いっそう※「グローバル」な行動をとることではないだろうかと考える。私たち自身が視野を広げ、地球規模で物事を考えるようにしなければならない。そして、日常の教育活動においては、これらの異文化体験を通して得た感動を、子どもたちに伝え、子どもたちの国際性や「豊かに共生する心」を涵養していくことが重要である。

また、日本の子どもたちが抱える課題についても引き続き取組を進める必要がある。今回行ったアンケートからも、日本の子どもたちの7%が、日本をいい国だとは思っていないという結果が出たが、これは、大人の意識にも同様のことが当てはまるのではないだろうか。いかにも平和そうで、経済的に豊かなイメージがある日本ではあるが、最近、「命の大切さ」を軽視する風潮や、いじめ、不登校、校内暴力、さらには家庭内暴力や児童虐待等、教育におけるさまざまな問題事象が多発している。「先進国日本」の人権状況についても一度教師も子どもたちも考え直すきっかけとしたい。

さらに、今後の課題として、国際性を持った教師のネットワークを広げ、子ども多文化共生教育、国際理解教育、開発教育の内容を深めることが求められる。まずは、そのための実践力を高めるように教育委員会としての研修、校内の自主研修等を積極的に行うことが大切である。そして頭で思うだけでなく実際に行動することで、学校や家庭、地域等において国際交流を促す教育の創造をめざしたい。

※ 「グローバル」：“Think Globally, Act Locally”＝地球規模で考え、地域社会で行動するという意)